

|                  |   |
|------------------|---|
| Title            | ビーレフェルト便り   |
| Sub Title        | From Bielefeld  |
| Author           | 渡辺, 茂(Watanabe, Shigeru)  |
| Publisher        | 慶應義塾大学グローバルCOEプログラム論理と感性の先端的教育研究拠点  |
| Publication year | 2010  |
| Jtitle           | Newsletter Vol.14, (2010. 12) ,p.6- 6   |
| JaLC DOI         |   |
| Abstract         |   |
| Notes            |   |
| Genre            | Research Paper  |
| URL              | <a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=KO12002003-00000014-0061">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=KO12002003-00000014-0061</a> |

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

## ビーレフェルト便り

### From Bielefeld

本拠点の海外連携拠点であるビーレフェルト大学は1969年創設の新進気鋭の大学であり、行動学分野はImmelmannが立ち上げている。僕が夏にここでキンカチョウの実験をするようになってから10年近くになり、共著論文も7篇ほどになる。実際の実験期間は毎年3週間程度だからまずまずの生産性である。当初は到着した日から帰国前日まで実験をするという、いまや絶滅危惧種の「日本人研究者」だったが、ここ数年はワイン祭りにも行き、大学院生にも特別講義をするようになった。実験系が確定するまではかなり苦労したが、霊長類とは異なる視覚系の機能の二重乖離をほぼ突き止めることができ、今年はそのアイデアを中心にした講義を行った。共同研究者はH.J.Bischof（海外事業推進担当者）で何分老人の共同実験であるから二人とも神経毒を注入するガラス管の先端が見えなかったりするが、お互い成果には満足している。おそらく来年の夏が最後の共同研究になろう。

研究室は森の中にあり、夏であれば夕食後にも里山歩きができる。これが僕の大きな楽しみである。独逸の森はすべて人工林だが手の入れ方が工夫されていて自然に見え、とくに樹の垂直線が美しい。野の花を摘んできて投げ入れを試みるのも一興だ。滞在の間に娟を競っていた色とりどりの花が少

しづつ減り、やがて、お花畑はショウマの白一色になる。そして僕の夏休みも終わる。  
(渡辺茂)

Hans-Joachim Bischof and I have been running joint research since 1997 in Bielefeld. Each summer I enjoy my stay at the University with wonderful atmosphere. We developed a new idea about avian visual system and I taught the idea to graduate students this summer. Both of us are retiring soon, the next summer will be the last summer of our joint research.



ビーレフェルト大学の動物行動研究室

## つくばカラス生態研究施設の近況

### Tsukuba Crow Research Station, 2010

本施設は2008年春に始動して以来、早いもので3年目を迎えました。設置の目的は、従前、神経科学・実験心理学的な手法を主としたカラスの認知研究を、その進化の要因を探るべく、動物行動学・行動生態学との融合研究を展開するためです。蓄積してきたデータは、今年度に入りようやく実ってきました。オス同士が推移的順位を長期に形成し、メスや下位オスは、これに気を配りながら個体間交渉や採餌に知恵をしぼっている暮らしぶりが見えてきました。オスは、仲良し行動に見える相互毛づくろいを、自身の優位性誇示に利用しており、オスの順位は、露骨な闘争ではなく、“表面上は”平和的方法で維持されているという社会の仕組みが判明しました。メスがどのようにオスの推移的順位を理解しているのかの解明は、暮らしと心の結びつきを例示する鍵となり、最終年度の中心テーマの1つです。また、カラスは、実験的訓練を一切せずとも、人間の視線を鋭敏に検出し、餌への集散を巧みに調節することも分かりました。これは、カラスが、オオカミなどの天敵が捕らえた餌を、間合いを取って“集り（たかり）寄生”する行動によって磨かれてきたと思われる。

カラスはこれまで、大型類人猿との認知的な類似性が強調されてきましたが、その進化因となる社会生態には、大きな違いがあることが解明されつつあります。本施設は、進化における心と暮らしの結びつきの多様性・共通性を理解すべく研究を展開していきます。  
(伊澤栄一)

Our 3-years-observational study on the social interactions in group-housing crows has come to the final stage and will provide the novel insight of the ecological demand to recognize transitive relationships between group members in their social lives.

